



日本の戦国者



荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官―一人は何のために戦うのか！―』ワニプラス
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

前回からの本物の日本人のための話を続けるよ。

難破して上陸した熊野荒坂の津から、大和の中心地である橿原へと向かった神武天皇御一行は、紀伊の険しい山岳に阻まれ橿原へのルートがわからず難儀をした。そこへ、八咫鳥（ヤタガラス）と呼ばれる案内の者が現れる。この地域では、今でも百姓仕事などをする際には編み笠を被るが、鳥追笠（とりおいがさ）や折編笠（おりあみがさ）等を被ると、頭のシルエットが鳥の嘴（くちばし）のように見える。また、雨風をよけるためにシュロの木で作った合羽を着ていたので、胴体のシルエットは鳥の羽のように見える。これに、杖をついて歩くと、まさに3本足の鳥のシルエットになる。この3本足の鳥のようなシルエットの八咫鳥と呼ばれた者が、熊野から橿原迄の道案内をすることになる。

熊野から大和への道中には、古事記・日本書紀に出てくる地名が今でもそのまま残っている。特に、今年、むすびの里の「建国記念文化研修」で訪れた奈良県宇陀市は、古事記・日本書紀に書かれている戦跡が、地名もそのままに残っているので、現地を使った戦史研修ができた。

まずは、穿邑（奈良県宇陀市菟田野）まで行くと、神武天皇が最初に陣営を取り弟狛（オトウカシ）を呼び寄せた小高い丘から周囲の地形を鳥瞰（ちょうかん）できる。敵方の監視点としては絶好の場所である。昨年の「建国記念文化研修」では、神話に出てくる弟狛の子孫である、橿原市今井町在住の今西啓仁氏が橿原の案内役を務めてくれた。その近くには、天皇を騙し打ちしようとした兄猾（エウカシ）を成敗した菟田の血原があり、今はその地に宇賀神社が建っている。そこから、少し西に進むと、道案内の役を務めた八咫鳥（建角身命）を祀る八咫鳥神社がある。

そこからさらに西へ進むと、国見の丘に立ちふさがる敵軍主力「八十たける」の軍勢と陣地を眺望したとされる高倉山があり、その近くの展望台から当時の両軍軍勢の配備が現地の地形で確認できる。敵勢は、女坂、男阪、墨坂の3正面に布陣し、予備兵力を後方の磐余村に配備していた。我々は、神武天皇最大の激戦地となった忍阪（女寄峠）を見て回り、敵を奇襲する為墨坂方面から迂回作戦をした丹生神社一帯を研修して廻った。その後、八十たける軍勢の予備軍が集結していた磐余

村と敵陣を偵察する為に向かった天香具山を訪れ、神武天皇が大和盆地に軍を進めた経路を実地で確認した。

その後、大和を支配していた饒速日（ニギハヤヒ）は、部下の長髓彦（ナガスネヒコ）を排して、神武天皇に帰順した。饒速日の御陵は生駒山山頂にある。

こうして、大和を平定した神武天皇は、橿原に都をつくり日本建国の理念を民に詔（ミコトノリ）された。この詔は、日本人が何のために国を創ったのかを知るために絶対に覚えておかななくてはならない。以下原文（日本書紀）の読みを記載する。

夫れ大人の制を立つ 義必ず時に随ふ（それ ひじりの のりをたつ ことわりかならずとぎにしたがう）
いやしくも民に利有らば、何ぞ聖造に



神武天皇が最初に陣営を取り弟狛（オトウカシ）を呼び寄せた穿邑（奈良県宇陀市菟田野）にある「神武天皇聖跡菟田穿邑顕彰碑」。



兄猾（エウカシ）を成敗した菟田の血原跡に建つ「宇賀神社」。



神武天皇が大嘗祭を執り行った鳥見山の「霊時」。

妨わむ（いやしくもおおみたからにくばさあらば、なんぞひじりのわざにたがわん）
且まさに山林を抜き払い、宮室を経営りて 恭みて寶位に臨み、以て元元を鎮むべし（またまさに やまをひらきはらい、おおみやをおさめつくりてつつしみてたかみくらいにのぞみ、もっておおみたからをしづむべし）
上は即ち乾霊の國を授けたまう徳に答え（かみはすなわちあまつかみのくにをさずけたまううつくしびにこたえ）
下は即ち皇孫の正を養ひたまえふ心を弘めむ（しもはすなわちすめみまのただしきをやしないたまうところをひろめむ）
然して後に六合を兼ねて以て都を開き（しかしてのちにくにのうちをかねてもってみやこをひらき）
八紘を掩ひて宇と為むこと亦よからずや（あめのしたをおおいていえとせむことまたよからずや）
夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば蓋し國のもなかか（かのうねびやまのたつみのすみかしはらのところをみればけだしくにのもなかか）
治るべし（みやこつくるべし）

残念なことに、米軍の戦後占領下に、日本国民の共通の価値観の大元であるこの「日本建国の理念」が日本の歴史から消されてしまったので、戦後の日本人は民族共通の価値観が失われてしまった。これを取り戻さなくては、日本の再建はないので、日本人の命を吹き込むために説明する。

夫れ大人の制を立つ 義必ず時に随ふ「大人（ひじり）」とは、りっぱな人間の事だ。「制（のり）」とは憲法や法律、規則の事だ。そもそも、憲も法も法も律も規も則も、和語で訓読すればすべて「のり」と読む。この文章の意味は、「立派な人が立てる“のり”（約束事）は、その時々把事情を斟酌するものでなくてはならない」ということだ。

いやしくも民に利有らば、何ぞ聖造に妨わむ「民（おおみたから）」とは国民にということだ。御歴代天皇は、国民の事を「大御宝（おおみたから）」とよんでいる。「利（くばさ）」とは幸福の事で、幸福とは「平けく安らげく」といい、「人々に争い事がなく、安心して生活できる様」のことをいう。人々に争いがないようにするためには「和する」ことが必要なので、日本語の「平和」という言葉が生れた。ちなみに「Peace」は（戦）争が無いことで、専制統治やワンワールドのよ

うなグローバル・ガバナンス・完全管理社会も争いが無いから、英国人は「Peace」だという。だから、「Peace」は日本人が考える「平和」とは根本的に違う。

ここまでの意味をまとめると、「国民が皆幸福になるという結果をもたらすことが正しい法と言える」ということだ。現代の「法」は、成文法で文面に書かれたことを、一人一人の事情や地域社会の特性も考えず杓子定規に強制するものだ。しかも、条件を規定するだけで結果については責任を持たない。だから、平等だ自由だと憲法でうたっても、現実には不平等で不自由な社会しか存在しない。平等と自由な社会を実現するためには、足の速い人には長く走ってもらうとか、お金のある人には多く払ってもらうとか不平等な条件が必要である。一人一人が自分の自由を犠牲にしながら他人のことを気遣うことで初めて平等な自由が生まれる。日本の建国理念では、結果としての国民の幸福を目指すとしていたんだ。

且まさに山林を抜き払い、宮室を経営りて 恭みて寶位に臨み、以て元元を鎮むべし「宮室（おおみや）」というのは、祭祀を執り行うお宮のことだ。ここでは、神武天皇が最初に天皇の御位につくために大嘗祭（だいじょうさい）を執り行うためにつくった祭祀の御宮のことで、この場所は、奈良県桜井市にある等彌神社（とみじんじゃ）の背後の鳥見山の山頂に霊時として残っている。「寶位（たかみくらい）」とは天皇の御位ということだ。「元元（おおみたから）」とは国民のことだ。大和言葉の音を基に、文章の内容に応じた適当な漢字を当てるので、漢字は変わるが大和言葉の音（訓読み）は変わらない。ここでは、元元その土地に住んでいた民（おおみたから）ということだ。

この文章の意味は、「天皇の御位を定め、大嘗祭を執り行って、その御位に謹んで臨み、国民をしろしめす」ということだ。大事なのは、神武天皇御自身が権力を持つのではなく、国民をしろしめすための天皇の御位を定め、天皇の先祖である天照大神と祖先の御霊と一体となるための大嘗祭の儀式を経た後、はじめて慎み恐れ畏まって天皇の御位に臨まれたということだ。国民を「しろしめせ」というのは、人々の思いと生活等を良く知って人々の幸福を全身全霊で祈るという天照大神（高皇御産靈神）から与えられた崇高な使命である。私を捨て強い覚悟を決

しなくては成らぬ御務めだ。このように社会的地位に使命と義務を与え、個人はそれに相応しい人格の持ち主でなくてはその地位につけない仕組みをつくったのだ。これは、個人主義・自由競争原理の否定つまり権力主義の否定であり、社会的地位に権威を与えその地位につく人に私心を捨て公に尽くすべきとする日本の権威主義である。いくら自由だ平等だと言っても、社会には必ず上下関係が生まれる。その結果、現代のような権力主義者がはびこらないようにするための叡智である。

上は即ち乾霊の國を授けたまう徳に答え

下は即ち皇孫の正を養ひたまえふ心を弘めむ

「上（かみ）」とは天皇のことだ。「乾霊の國を授けたまう徳（あまつくにをさずけたまううつくしび）」とは、天皇の先祖である天照大神（高皇産靈神）から子孫たる天皇が言い渡された「しろしめせ」（人々の思いや生活ぶりをちゃんと知ってあげなさい）という使命の事だ。「下（しも）」とは国民のことだ。この文章の意味は、「天皇は国民のことを思い、国民は天皇の大神心に応える」ということだ。天皇はそれぞれの地域の在所共同体を支える人々が祀る神を敬い、その人々が祖先から継承する伝統文化を尊重し、在所共同体の人々の弥栄のために朝に夕に全身全霊で祈りを奉げる唯一無二の御存在である。また、国民は、縄文時代からずっと家（在所共同体）を守ってきたからこそ、自分達の家を大事に思ってくれる天皇に感謝し報恩の念をもって心をついに日々力を尽くす。しろしめし祈る天皇と報恩感謝の念で力を尽くす国民の心の絆が日本国家を形成してきたんだ。この天皇と国民との心の絆こそが日本である。その中間にある世俗の政府や幕府などは腐敗すれば交代するが、天皇と国民の絆だけは変わることなく世界最古の国家を形成してきた。それが日本だ。

そして、「しろしめし」「祈る」という行為は、他者を理解し、他者の幸福を祈る「利他のための存在する自己」という価値規範を体現している。これに感謝し報いるということは、主体的にその価値に賛同し、「集団のために存在する自己」という価値観を体現する。これは、共同体間の紛争を抑制し、強制によらない自律的な平和環境を創造する原理である。神武建国の精神の中に、日本人が育んできた崇高な価値観があるのだ。